

第一に問題となるのは、この時期に達成された中国からの「独立」とは何だったのかということである。唐末五代にはそれは藩鎮割拠から十国の一つへの道だったが、宋代には冊封体制に参入して外藩の位置を確保することが求められた。そこで“安南都護府の後身”としての唐的な王朝国家が形成されたが、それは権力の東南アジア的体系性となお両立するものだった。

第二に、上の問題と表裏一体をなす「ベトナム型華夷秩序」の内実が問われる。10世紀の独立の前後に特に問題になるのは、雲南（南詔・大理）および占城との関係である。独立前後において、ベトナムの“雲南化”の可能性は十分あった（雲南も一定の中国化をとげている）。雲南＝西方の自己と対等の世界という意識は15世紀まで存続する。占城についても、これを当初からの朝貢国とみるのは当たらず、自己の統合のために勝利の遠征を行う対象ではあったが、同時に両方向に亡命や干渉が行われるような関係でもあった。領土拡大としての「南進」は、14世紀以降の現象である。

13世紀から15世紀にかけて、元・明代東アジアの変動に対応して、ベトナムの東南アジア的側面は中国的体系の中に包摂されてゆく。「中国式民族国家」としての統治体制の整備と歴史の再構成が行われ、南の占城、西の哀牢などを含む「ベトナム型華夷秩序」が実現される。こうして、長い試行錯誤と変容の末に、「小中華」ベトナムが確立したのである。

ベトナムにおける植民地支配と華僑

—コーチシナを中心に— 高田洋子

フランス植民地化以前のメコン・デルタは、ベトナム王朝の支配権力が十分に浸透しない多民族的な空間であった。フランス植民地政府はこの地域に資本主義経済の支配原理を導入し、植民地的統合を果たした。その結果メコン・デルタには、大規模な米輸出地帯が出現したが、華僑は、この米産業の発展のなかで流通・加工部門を担い、植民地経営上も不可欠の存在となった。では、ベトナム南部の植民地再編過程の中で、フランスは中国人移民をどのように受け入れ、位置付けたのか？ 当時、同様に華僑の存在が大きくなりつつあった他の東南アジア各地と比較すると、フランスの華僑政策にはどのような特徴があるのだろうか？

ベトナムにおけるフランスの華僑統治の原則は、(i)人種的隔離、(ii)民族的差別、(iii)経済的利用の3つに尽きると思われる。報告では、初めに植民地時代の中国人移民の趨勢を概観し、続いて①阮朝の政策から継承・再編した「幫」制度、②人頭税の問題、③華僑経済の発展と危機などから植民地政府の華僑政策を論じたい。

社会主義陣営の中のベトナム——栗原浩英

ベトナム共産党は1954年北部ベトナムで実質的に政権を掌握して以来、その国家の存立意義を常に何らかのブロック（「民主陣営」「社会主義陣営」「世界社会主義体制」「社

会主義共同体)」との関連において説明してきた。このようなブロック志向は、政治・経済・軍事各面での支援確保という現実的な要請にとどまらず、ブロックを介して世界革命に寄与しようとする変革主体——ウォラーステインのいう「反システムの運動」——としての共産党の認識にもよっていた。すなわち、社会主義国家としてのベトナムは地域国家という枠組ではとらえきれない側面をもっている。

本報告は、1954年以降現在に至るまでのベトナム共産党のブロックに対する認識の変化をその反システム性に着眼して分析するとともに、そこでは具体的な形態としての地域革命（ベトナム、インドシナ）がブロック（あるいは世界革命）にどのように結合され、正当化されていったのかを再検討しようとするものである。

時期区分については概ね、以下のように論じる予定である。

- (1) 1954-59：社会主義陣営の一員として陣営全体の意志に従いながら、反システム性を追求——ジュネーブ協定遵守、地域国家。
- (2) 1959-78：主体的に反システム性を追求した時期——国家社会主義体制の成立、南ベトナムにおける武力解放闘争の遂行、南ベトナムの社会主義的統合（資本主義世界経済からの離脱）、地域革命としてのインドシナの浮上。
- (3) 1978-86：それまでの反システム性の限界と矛盾が表面化した時期——反システムの勢力同士の衝突、「社会主義共同体」（ソ連陣営）への傾斜とインドシナ三国グループの形成。難民流出、中越関係悪化、カンボジア紛争に伴う東南アジア地域・諸国家（ASEAN）との接点の形成。
- (4) 1986- ：反システム性の追求自体が困難となった時期（地域国家か反システムの運動体かの岐路）——「社会主義共同体」の中核におけるシステム統合的勢力の出現と「社会主義共同体」の自壊、インドシナ三国と ASEAN という対抗図式の変化、ベトナム経済の世界経済への統合という方向性。

資料・研究短報

ヴェトナム語に翻訳された外国文学—日本文学を中心として—

和田正彦

ヴェトナムでは、1975年の南北統一後、ことに1980年代後半になると、外国文学の翻訳が盛んになる。これは、国土統一による平和の実現によって、ヴェトナム国民にも心の余裕ができたこともあるが、ドイ・モイという経済解放政策の影響で、出版社も独立採算制となり、読者に読まれる本、読者が読みたい本を出版するようになったためと考えられる。

筆者は、ハノイ総合大学ヴェトナム語科へ留学した1985年10月から1987年7月までの約2年間に、研究のための歴史や言語学や古典文学に関する本とは別に、ヴェトナム語の勉強や教授資料として役立つのではと考え、ベトナムの小中学校の教科書やヴェトナム語と外国語との辞書（例えば、英越辞典、仏越辞典、露越辞典、独越辞典、漢越辞典、